



共同研究 「アジアにおけるコミュニティの再考」

水俣病支援者コミュニティに関する公開研究会と現地調査

所員 神奈川大学経営学部教授 高城 玲

1. はじめに

2023年度から、アジア研究センターにおいて共同研究「アジアにおけるコミュニティの再考」が新たに立ち上げられた。アジア地域が経験してきた／している歴史的動態をコミュニティというキーワードに注目して各地域・事例の比較研究を行うことが目的である。特に、それぞれ多様な存在どうしが矛盾や競合を含みながら、場所や歴史的な状況に応じて常に変化する緩やかな相互影響関係の集まりとしてのコミュニティにも注目する。そのことを通して、均質性や境界を前提とする従来の伝統的なコミュニティ概念を各地域の具体的事例から再考することを目指したい。

研究会のメンバーは、外国語学部の村井寛志、梅崎かほり、国際日本学部の中林広一、経営学部の泉水英計、高城玲、知花愛実の各氏のほか、本学名誉教授の永野善子、山本博史、東京大学特任研究員の八尾祥平、本学非常勤講師の持田洋平の各氏も加えて計10名で、高城が代表をつとめる。本共同研究には、歴史学、社会学、文化人類学、国際関係論、地域研究など多様な背景をもつ共同研究者が参加し、対象とする地域も幅広いが、研究の焦点として主に以下の2つを想定している。(1)人の移動を契機にした移動先や出身地との新たな相互影響関係の中で生まれる移民や移住のコミュニティ、(2)多様な背景をもった個が活動への参加を通じて生み出される運動やNGOのコミュニティなどである。

初年度である今年度は、上記の背景から、まずは(2)の運動のコミュニティに関連する研究会と現地調査を計画することで、多様な専門分野と研究対象地域の参加者の間で、議論を共有するひとつの基盤となることを意図した。具体的に計画されたのが、以下で報告する水俣病支援者コミュニティの運動に関する公開研究会と現地調査である。

2. 公開研究会

まず、2023年7月25日(火)に本学みなとみらいキャンパスにて、平井京之介氏(国立民族学博物館／総合研究大学院大学 教授)お招きし、「支援者コミュニティの社会経済学——水俣病センター相思社の50年」と題する発表の公開研究会を開催した(ポスター参照)。なお本研究会は、アジア研究センター内の連続研究会としても位置づけられた。

平井氏は、『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』(京都大学学術出版会、2012年)の編者でもある。コミュニティを歴史的に構築される状況の産物であり、常に変化する実践の活動領域として捉える同編著での視角は、本共同研究にとっても参考となる。今回の平井氏の発表では、

2005年以降計19ヶ月に及ぶ現地水俣での調査から、特に支援者コミュニティである「水俣病センター相思社」の歴史的変遷と動態を、前史、闘争期、行政との協働期という3つの時代区分に切り分けながら詳細な具体的事例を踏まえて報告頂いた。相思社では、被害者や闘争する人々との日常的つきあい、行政との協働、考証館という水俣病を伝える活動など、日常的な実践によって相互に共有するものを蓄積していくことで、コミュニティの自律性と同時に自らを反省的に認識し直す再帰性を獲得してきたことが示された。境界を前提としない常に変化する相互影響関係の集まりとしてのコミュニティという本共同研究のひとつの視角にとっても示唆的な内容であった。

特に個人的に印象深かったのは、支援者コミュニティの運動を、ピエール・ブルデューが提起する経済的社会的構造(社会経済学)という側面からも検討する視点、さらには、界という概念で捉え直しその変化を問うという視点である。そこでは、コミュニティを界という概念で問い返す可能性も示唆されていた。

3. 現地調査

上記の公開研究会を受けて、約1ヶ月後の8月28日(月)～29日(火)には、熊本県水俣市にて、水俣病センター相思社、水俣病歴史考証館、水俣病を語り継ぐ会、水俣市立水俣病資料館、親水護岸、旧チッソ(現JNC)水俣製造所正門、百間排水口遺構のほか、患者多発地帯である茂道地区、坪段地区を訪問調査した。参加者は、泉水、村井、知花の各氏と高城の4名である。



公開研究会ポスター



写真1 水俣病センター相思社、水俣病歴史考証館での説明

訪問調査にあたっては、公開研究会で発表頂いた平井氏のほか、現地水俣で1970年代初頭から長年支援活動に携わってこられた吉永利夫氏(一般社団法人水俣病を語り継ぐ会理事)に訪問先の選定、案内などにおいて助言、調整を頂いた。

水俣病センター相思社、水俣病歴史考証館では、考証館の展示を見学し、常務理事で実際に現場の活動も担っている永野三智氏から案内と説明を受け、質疑に応じて頂いた(写真1)。特に、相思社の歴史の中でも、行政との協働を経た近年の新たな活動について、若い職員等が地域づくりや水俣まち案内などを積極的に展開していることが説明され、支援者コミュニティが時代と状況に応じた相互関係の中で変化していることがうかがえた。

水俣病を語り継ぐ会においては、支援者コミュニティで特に1970年代の初期から闘争期、協働期の活動を経験されてきた吉永氏と、被害当事者でもある吉永理巳子氏から歴史的变化と現状について話をうかがった。支援運動の当事者と家族を亡くされた被害当事者の経験は、まさに語り継がれるべき重いものであった。特に、水俣病で亡くなった母親を題材とする紙芝居も上演して頂き、水俣病を伝える当事者と支援者の日常的な活動に触れることができた(写真2)。加えて、1970年代の闘争期



写真2 水俣病を語り継ぐ会での紙芝居上演

における支援活動として、東京での座り込み運動を支援していた当事者からも話をうかがうこともできた。

水俣市立水俣病資料館、親水護岸、旧チッソ(現JNC)水俣製造所正門、百間排水口遺構のほか、患者多発地帯である茂道地区、坪段地区では、かつての写真と比較しながら案内と説明を受けた(写真3)。市立水俣病資料館の展示は、数年前に大きく変更された際に、相思社の関係者とも協力して行われたとのことで、かつての闘争期を経て支援者コミュニティが行政とも協働する社会状況へと変化していることが実感された。また、旧チッソ(現JNC)正門や排水口遺構、患者多発地帯は、支援者コミュニティの活動としてまち案内で外部からの訪問者らが今なお訪れる場所であった。1956年の水俣病公式確認から67年を経た現在も水俣病を伝える活動が日常的に行われ、新たな支援者コミュニティが紡ぎ出されていく現場ともなっていた。



写真3 水俣市親水護岸での説明

4. おわりに

1回の公開研究会と1泊2日という短期間の現地訪問調査ではあったが、被害当事者と支援に関わってきた当事者らの数十年に及ぶ運動の圧倒的重さに触れる貴重な機会となった。支援運動のコミュニティが、社会歴史的状況の中で生み出され、今現在も変化している過程のなかにあることを改めて認識させられた。今回の公開研究会と現地調査をひとつの出発点、参照点として、コミュニティ再考という本共同研究の今後の活動を考えていきたい。

参考文献

- 平井京之介編 2012『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』 京都大学学術出版会。
- 平井京之介 2021「考証館運動の生成——水俣病運動界の変容と相思社」『国立民族学博物館研究報告』45(4)。
- ブルデュー、ピエール 2006『住宅市場の社会経済学』 山田鋭夫・渡辺純子訳 藤原書店。